

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-12-07

<2011年度特色あるFDへの取組み>FD助成 金成果報告：初修外国語教育におけるアカ デミック・コミュニティの形成とその「見え る化」のための取り組み

近江屋, 志穂 / Onaka, Kazuya / Omiya, Shiho / 大中, 一彌

(出版者 / Publisher)

法政大学教育開発支援機構FD推進センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教育研究 / Journal of Hosei Educational Research and Practice

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

2013-07-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023677>

〈2011年度 特色あるFDへの取組み〉 FD助成金成果報告

初修外国語教育におけるアカデミック・コミュニティの形成とその「見える化」のための取り組み

“Visualizing an Invisible : French as a Second Language and Academic Tradition of Hosei University”

近江屋志穂（法政大学法学部） 大中一彌（法政大学国際文化学部）

キーワード

現状把握、フランス語コミュニティ、コミュニケーション

要旨

近年のフランス語教育をめぐる状況の変化に対応すべく、現状の正確な把握から始め、授業運営改革、コミュニティ形成、フランス語教育振興、のテーマに従って活動を進めた。従来型の教育法の長所を生かしつつ、コミュニケーションを志向する授業への緩やかな転換を方針と定めた他、教育の質向上にとって、学部横断的な教員間、教員・学生間のつながりが重要であることを再確認し、情報発信ツールの整備により、その強化に努めた。

第1部 2010年度

1) FD参加の背景、目的

法政大学FDセンターから「特色あるFD助成金」の配分を受けるかたちで、法政大学フランス語科会が、「初修外国語教育におけるアカデミック・コミュニティの形成とその『見える化』のための取り組み」(以下「本取り組み」)を、2010年から2011年度の二年間にわたり実施した背景には、大学とその環境をめぐる危機感があった。すなわち、外国語教育におけるFDは、教育法の改善や共通教科書の作成など教室内での活動に焦点をあてたかたちで取り組まれることが多いのであるが(そしてそれは教科実践上たいへん重要であるが)、こうしたミクロの解

決では必ずしも追いつかないマクロな状況変化が起きているという危機感である。ここでいうマクロな状況変化とは、大づかみでいえば、①新興国やオイルマネーの台頭を背景として、中国語やアラビア語など、非ヨーロッパ系統の言語の重要性が相対的に増したこと、そしてそれ以上に、②英語の一言語主義が新興国を含めて世界中を席巻していること、の二点に要約される。

本取り組みが、アカデミック・コミュニティの形成に力点を置いたのは、「ボアソナード博士を学祖としフランス法系のリベラルな学風」をもつとされる大学史の語りを引き受け、この語りに、単にシンボリックな言説というのではない、学問上、組織上の内実を与えようとする

立場を採ったためである。そして本取り組みは同時に、初修外国語（いわゆる第二外国語）教育という観点から、「なぜ」フランス語を学ぶのか、そしてその学習は、どのような見通し（職業上その他の）を学生に与えるものであるのか、という問い合わせに答えようとするものでもあった。従来、この問い合わせに対しては、「教養」という答え、すなわち外国語の修得は、各専攻分野を学ぶ前提をなしている、あるいは、職業生活を超えて、ひとりの人格として文化的豊かさを享受するのに必要な知識である、といった答えが与えられがちであった。本取り組みは、こうした答えの正しさを否定するものではないが、しかし、前述のようなマクロな状況変化のなかにあって、より具体的に肉付けされた情報を、組織的な取り組みのなかで発信していくことが必要との発想に立つものであった。

とはいっても、箕作麟祥校長、梅謙次郎学監の時代は遠く、フランス研究の薰り漂うアカデミック・コミュニティが、所与のものとして、学内において統一されたかたちで存在していたわけではなかった。市ヶ谷、小金井、多摩の各校地は、それぞれ独自の教養教育カリキュラムを開拓しており、かつ、市ヶ谷では学部を超えた共通カリキュラムが、いっぽう多摩では各学部ごとに異なるカリキュラムが、それぞれ構築されて久しかった。したがって、本取り組みの最初の課題は、この校地ごとの差異を尊重しながらも、マクロな状況変化への対応が必要との共通認識に立って、組織的なつながりを創り出すことにあった。市ヶ谷校地からの発案ではあったが、小金井や多摩校地の学部に所属する専任教員がフランス語FDワークショップや教科書打ち合わせ会に参加したり、小金井校地の学生を含む、各学部所属の希望者を網羅したフランス語履修者向けメーリングリストを作成・活用したりといった試みが、こうしたつながりを志向した例である（後述）。

また、教員間でも学部、校地を超えたつながりを作り出すべく、メーリングリストを作成し

日常的な情報交換に努めるとともに、ワークショップも定期的に開催した。当然とも思われるこうした活動は、しかし、教養部を解体した結果として、従来は各教員のまったく個人的なイニシアチブや、私的なつながりに依存してしか存在していなかったのである。そのことを思えば、こうしたFD活動は、ささやかではあるが、本学がフランス研究においてかつて有した組織的な取り組みの水準に復帰するための第一歩といえるであろう。「フランス語FDワークショップ」と名づけられた前述の会合では、学部を超えたミニマム・リクワイアメントの策定や、兼任講師の方々からのフランス語教育の現状に関する意見の聴取、フランス人教員によるFLE（外国語としてのフランス語教育）についてのプレゼンテーションなどを実施した。またアカデミック・コミュニティの「見える化」のための重要な施策として、交換留学生対策がある。この施策の対象には、派遣留学生としてフランス語圏に旅立つ本学学生のほか、本学への留学のために来日するフランス語圏の学生の組織化も含まれる。海外の協定校において、本学の評価が口コミをつうじて高まることは、本学への留学を目的として来日する外国人留学生数の増加のみならず、最終的には本学からフランス語圏に留学する学生の協定校における待遇の改善にもつながりうる。この施策を重視する観点から、教員による前述のワークショップには、外国人留学生や、フランス語圏への留学を希望する本学の学生の参加を積極的に推奨し、議論の一部をフランス語で行うなどの措置も講じた（後述）。

2) 法政大学におけるフランス語教育の基盤となる法学部・文学部・経営学部の1年生必修フランス語クラスの運営方法の改善、および今後の課題

次年度（2011年度）は、法学部・文学部・経営学部の1年生必修フランス語クラス（全13クラス）を3つのグループに分け、そのうちの1つのグループ（4クラス）では、『スピラル』を共通教科書に指定する旨¹⁾、2010年度に決定した。この『スピラル』を使用するグループではフランス人教員と日本人教員がペアとなって週2回の授業を行うものとされた。この3グループ制の実施の詳細については後述するが、2010年度におけるこの仕組みの導入にあたり感じ取られた課題について、ここでは二点ほど簡単に記しておきたい。まず第一に、多くの授業を担当して下さっている、非常勤専業の兼任講師の先生方に、スキル向上のための機会を大学が提供することが、課題として挙げられる。兼任講師の方々の待遇改善は、我が国多くの大学が直面している課題であるが、変革期にあって財政問題にも直面している私学経営からすると、その待遇改善は容易なわざではない。教員のスキル向上に必要な資源を大学が提供するという方策は、FDを円滑に進めるという大学側の目的にとってだけでなく、ひとりひとりの兼任教員にとっても利益となりうる側面を含んでおり、本学の教育環境を魅力的なものにしていくためにも、今後追求すべき方策と考えられる。そして第二に、CALL教室に代表される、ICT技術の活用が²⁾、語学教員にとって必須のスキルとなっていくであろう点が挙げられる。優れた言語運用能力に加え、コミュニケーション・スキルを効率的に学習しうるような授業をデザインする能力が、これから語学教員には不可欠である。こうした文脈において、大学側は、CALL教室やLL教室の一層の拡充や質的向上に努めるとともに、その活用のために必要な支援を、兼任講師を含めたスタッフ全体に提供する必要がある。

3) 「2010年度 教員向けアンケート」の分析

本学におけるフランス語教育に関する先行研究としては阪上脩「大学における外国語教育の問題－学生のフランス語文法知識－」（『法政大学教養部紀要』1986年、109-123頁）がある。この論文からは、教養部が存在していた1980年代までは、市ヶ谷校地におけるフランス語クラス授業で用いられる教科書が、二種類の教科書に限定されていたことが分かる。また、「大学における第2外国語授業は、文法を出来るだけはやく終えて、どんどん原書を読んでいくのがよいという考え方」と、「多くの学生が理解して、はじめてつぎの段階へ識義を進め」るべしとする考え方（122頁）とのあいだの葛藤が、専任教員の側の問題関心として存在していたことが読み取られる。

ひるがえって、2010年度のフランス語FDプロジェクトでは、到達度の尺度として文法項目の進度を用いるという発想そのものが、問い合わせされることになった。市ヶ谷校地の大規模学部（法学部、文学部、経営学部）では、1年次、2年次において初修外国語一ヵ国語の履修が必須であり、とりわけ1年次では、フランス語1（文法）、フランス語2（表現）という二つの通年授業の履修が基本的な学習形態となっている。今回のFDプロジェクトにおける取り組みは、フランス語1については文法学習のさらなる効率化を図るとともに、フランス語2については、文章の講読や作文のみならず、よりオーラル・コミュニケーション（話す、聞く）に特化した授業を展開する必要性があるという認識から出発していた。

とはいって、全体の指向性を練り上げていくにあたっては、まずその前提として、部内での調査が必要であり、そのために、教員向けアンケートを実施することとなった。アンケートは、2010年6月に実施し、専任教員9名、兼任教員21名の合計30名から回答を得た³⁾。

4) フランス人留学生による仮検対策

派遣留学で本学に来ているフランス人留学生と、本学から派遣留学を希望する学生を中心としたフランス語履修者のあいだでの学習会が複数回行われ、携帯電話サイト上の広報にも、その風景の一部を写真付きで公開した。単なる紙の上の学習だと無味乾燥となりがちな初中級の語学学習も、具体的にコミュニケーションする同年代の留学生が目の前にいることにより、高いモチベーションを保ちながら行えたようである。

5) 3回のワークショップ開催

フランス語担当の多くの教員（小金井、多摩校地含む）の参加を得て、本学におけるフランス語教育の今後の方向性や、授業改革の方向性についての議論を闊達に行なった。いわゆるネイティヴ・スピーカーの教員も多く、会議の半分程度はフランス語で行われた。

6) メーリングリストの立ち上げ

法政大学にはフランス語を専門とする学部が存在しないばかりでなく、教授室がBT、55年記念館、富士見坂校舎の三箇所に分散しているため、教員同士が顔を合わせる機会を持ちにくいなど、コミュニティ形成へ向けての制約が多い。そこでまず、フランス語担当教員のメーリングリスト（fle）を立ち上げることから始めた。

フランス語選択の学生同士、及び学生と教員同士のコミュニティ形成に関するメーリングリスト（francophonie）の立ち上げから始めた。FD活動に伴うアルバイトの募集、フランス語の各種試験、講演会、イベントに関する情報発信はこのリストを通して行なった。なお、このフランス語履修者向けメーリングリスト「フランコフォニー」は市ヶ谷情報センターのサービスを利用して作成・活用されている⁴⁾。

第2部 2011年度

2011年度は、前年度の活動を引き継ぎ、授業改革、フランス語コミュニティの形成、フランス語教育振興、の三つのテーマに従って活動を進めた。また、現状把握のため、前期と後期に学生を対象としたアンケート調査を行なった。

はじめにそれらの活動の概要、ついで成果と考察、最後に今後の課題について述べる。

I. 主な活動

1) 現状把握

法・文・宮の1年生必修フランス語クラス（13クラス）を対象に、前期と後期の2回にわたり、アンケート調査を実施した。この調査は、法政大学のフランス語教育の現状を把握し、改善に役立てることを目的とした。

実施方法は次の通りである。アンケートにアクセスするためのQRおよびURLを授業内で学生に配布し、各自携帯またはパソコンから回答させるようにした。集計業務は株式会社エイチ・ユーに委託し、記述式回答の分析作業の補助には学生のアルバイトを募集した。前期は受講者280名中245名が回答した。後期は授業出席者240名中206名が回答した。

前期は学生のプロフィール⁵⁾とニーズを把握するための質問を用意した。後期は主にフランス語の授業への満足度・目標達成度を把握する目的で調査を行なった。それぞれ本報告の文末に質問内容を（後期に関しては回答結果も）記載した。回答の内容については本文中で適宜言及する。

2) 授業運営改革

2010年度の決定（上述）に基づき、4つのクラスがスピラルクラスとしてスタートした。これらのクラスについて、取組み責任者（近江屋）が3名の日本人担当者に聞き取り調査を行い、2名のフランス人教員の授業を一度ずつ見学し

た。

3) ワークショップ開催

2年間のFD活動の総括を目的とし、2012年2月21日（10時30分～12時30分）、BT0705において第4回ワークショップを開催した。「スピラルクラス」総括としては本学のフランス人兼任講師、コリーヌ・ヴァリエンヌ氏に講演を依頼した。市ヶ谷校舎兼任講師12名、専任教員8名、小金井校舎専任教員1名、学生7名、フランス人留学生6名が参加した。

4) オリジナルグッズの製作

法政大学におけるフランス語教育の振興を目的として、フランス語選択クラスのオリジナルクリアファイルを作成した。これは後期アンケートに回答した学生に配布した。

5) メーリングリストの活用

2011年度は授業運営上、およびFD活動実施のため、積極的に情報を発信した。主なものは次の通りである。

- ・スピラルクラス担当の先生方に向けた授業目的確認文書
- ・フランス語各種検定試験一覧表
- ・第25回獨協大学フランス語教授法研究会、春・秋日本フランス語教育学会への参加奨励
- ・「フランス語2」前期期末／後期中間試験問題例
- ・「フランス語1」・「フランス語2」担当者間、「フランス語1／2」・「フランス語3」担当者間の連絡票
- ・ワークショップへの学生参加呼びかけ、FD活動補助の学生アルバイト募集

II. 活動の成果と考察：コミュニケーションを志向する授業へ

1) アンケート結果

前期アンケート中のQ6「フランス語の授業でどのような能力を身につけたいか」、Q8「外

国語の授業にどのようなことを期待するか」は、教員側の疑問を率直にぶつけたものである。近年の学生のニーズはますます「コミュニケーション」に傾いていると一般に言われるが、本当にそうであるのか、実は20年前の学生のように、「文学作品を原書で読みたい」からフランス語を学ぶという者が多数存在するのではないか、という疑問があったのである。

結果は外国語の授業に期待すること（Q8）として「原書が読めるようになること」を挙げた学生は10%、「文法・訳読中心の授業」は11%であった。「会話表現中心の授業」、「会話が上手になる」、「人とのコミュニケーションの取り方が身につく」はあわせて53%であった。また、フランス語の授業で身につけたい能力（Q6）として「意思疎通に必要な最低限の語学力」を挙げた学生は43%であった。Q6とQ8を見る限り、多くの学生がフランス語を口頭で表現できるという意味での「コミュニケーション能力」の習得を望んでいることが分かる。

学生も理由なしにそう回答しているのではあるまい。近年の国際化の影響により、学習者のニーズは20年前と全く同じであるはずはない。そして現在の学生が受けている教育も、20年前のそれとは異なる。学生は小学校から英語を習い始めたり、高校の必修授業で第二外国語を学習したりする。語学留学のため海外に短期滞在することも珍しくはない。こうした状況の中、大学の語学教育への期待に変化が見られるのは当然である。

この結果をふまえ、法政のフランス語教育のカリキュラムから文法と講読をなくそうというのではない。ただ、1年次の週2コマの選択必修授業の一つ、「フランス語2」をコミュニケーション中心の授業と定めるのである。文法の学習はもう一方の「フランス語1」で行われるようにする。それによって文法の授業が週1コマになり、扱いきれない項目も出てくる。それを2年次の前半に引き継ぎ、これまで1年間にわたって行われていた講読は、2年次の後半で行

うこととする。つまり文法+講読から会話中心の授業へという大転換ではなく、今までのカリキュラムの中に「コミュニケーション」の場所を確保するという、緩やかな改革を意図するのである。そのためには、従来のように1年次に文法、2年次に講読、というリズムを変更せざるを得ない。

そして「フランス語1」と「フランス語2」の役割分担を徹底する必要がある。これまで担当者が二人とも日本人である場合、2コマとも

文法中心の授業になるケースが見られた。必修2コマの役割分担を明確にすることで、そうした重複を避けることができよう。

2) 授業運営改革

上述の通り、前期から後期にかけ、スピラルクラスの授業状況を調査した。結果は以下の通りである。

当初の懸念に反して、概ね問題なく授業が実

クラス	人数	授業の進め方	状況
A	10	フランス人教員と日本人教員とのリレー方式。	特に問題なし。
B	20	フランス人教員が『スピラル』を進め、日本人教員が授業の進度にあわせて文法テキストを使用。	特に問題なし。
C	25	日本人同士のペア。一方が『スピラル』を進め、もう一方が文法テキストを使用し、それぞれ独立して授業を行う。	特に問題なし。学生は二人組練習に積極的に取り組む。
D	28	はじめはフランス人教員と日本人教員とのリレー方式。前期半ばで両教員が『スピラル』に沿ったかたちでプリントを作成し、それぞれ会話、文法の授業を行う。後期は学生からの要望もあり、日本人教員が文法テキスト（『ル・フランス・ファシリ』、斎藤昌三、白水社）を併用。	前期は学生によって取り組み方に差が見られた。後期は改善した。

施された。だがクラスDは途中で方針の転換を余儀なくされた。人数が多めということもあり、二人組の練習時に教員がすべてのグループを見回るのが難しく、学生側は指示を理解せず練習していない者も見られた。しかし後期以降は学生の取り組み方に大きな改善が見られた。現段階ではこの4クラス分の資料しかないと、テキスト『スピラル』そのものに原因があるのかどうかは判断できない。

2月のワークショップの折に、『文法と会話⁶⁾』の方が大学生の授業に適しているのではないかという意見が出された。『スピラル』のようにコミュニケーションに重点を置いたテキストであるが、説明がよりシンプルであり、ボキャブラリーの数も少ない分、初修者にとって取り組みやすいというのがその理由である⁷⁾。確かにそのようなテキストを使えば、授業の運営はクラスの人数や学生のモチベーションの度合いに左右されにくいでであろう。また、各課の構成は文法と会話が半分ずつであるため、日本人教員

とフランス人教員とのリレー式の授業にも適している。

以上をふまえ、今後は必ずしも『スピラル』を使わなくても良いこと、ただしできればリレー式によって授業を進められるような、表現の学習中心のテキストを選択する、というふうに方向を定めた。

尚、『スピラル』はイニシエーション2回分+21課で構成されている。「はじめに」では週1コマ90分の授業回数でも1年で終えることが可能とされているが、過去2年間の状況を観察する限り、1年で10課程度までというのが無理のないリズムである。そこで2年生以上向けの選択授業「フランス語視聴覚III/IV」でテキストの続きを学習できるようにし、学生にもそのように周知した。

全体のクラス運営については、2011年度には「3グループ体制」から「2グループ体制」へと移行した⁸⁾。

3) 「フランス語2」オーラル試験実施

2011年度から「フランス語2」の担当教員には学習内容について、何らかの形でオーラルの試験を実施し、成績にその結果を反映するよう要請した⁹⁾。試験の内容および成績評価方法については、各担当者に委ねることとした。

目的は、「フランス語2」の役割を明確にすることである。すなわち「フランス語2」の授業内容を「表現」とする以上、試験・評価方法も表現能力をはかるようなものでなければならない。

前期アンケートでは、「望ましい授業担当のあり方」について、78%の学生が「ネイティブの教師と日本人の教師とで役割分担する（ネイティブが会話、日本人が文法を担当する）」を選んでいる。しかし時間割を実際にそのように組むことは不可能であり、またそのような方法が最も学習効果を上げるとは限らない。そこでせめてネイティブの教師の授業方法に近づけるように、日本人教員も「表現」中心のテキストを選び、試験もオーラル中心にするようにした。

長期的な目標は、学生がDELF A1¹⁰⁾に対応できるようにすることである。フランス語の資格試験であるDELFは、「読解」、「聴解」、「会話」、「文書作成」の4部に分かれている。これは4つの能力を均等にはかるテストであるが、一番易しいレベルから会話の試験が課されるという意味で、コミュニケーション重視の試験と言えよう¹¹⁾。2年間で法・文・営の学生全員がDELF A1合格というのは非現実的な目標であるが、少なくとも DELF 受験に学生の目を向けさせ、合格のためのベースを作りたい。

それは法政大学の派遣留学生制度を充実させ、出願学生のレベルを上げることにつながる。派遣留学生選抜試験の出願には、実用フランス語検定3級以上、またはTCF（フランス語能力テスト）レベル1以上のスコア、またはDELF A1以上が要求される。フランスで通用するDELFを取得しておくのは学生にとって

好都合である。また、読む、聞く、話す、書くの4つの能力を試すテストが課されるため、取得者において総合力が高いという傾向が見られ、結果的に派遣留学生選抜試験で有利である。このような試験に対応させるために、普段から訓練をさせることができが望ましい。学生の中には、会話以前に面接試験自体に抵抗のある者も見られる。大学の定期試験に口述試験を課すことで、そうした学生に練習の機会を与えることができる¹²⁾。

オーラル試験の具体例を示すため、取組み責任者（近江屋）の中間・期末試験の内容を試験終了後にメーリングリスト上で公開した（文末資料5）。

また、ワークショップに出席した「フランス語2」の日本人担当教員6名に、試験実施方法と内容についての文書作成をお願いした。それによると、担当者たちはそれぞれのテキストの内容に従い、フランス語による一対一の面接試験を行なった。あわせて筆記試験を行った教員もいる。「口頭試問を中心に据えた試験を実施するためには、十分な授業回数を確保するか、学習内容を更に絞り込む必要がある」という意見も出された。確かに前期は比較的易しい事柄を学習するため、質問に答えるという意味での「会話」の試験に学生が十分対応できる。しかし後期に内容がより複雑になると、ある程度試験問題を単純化せざるを得なくなる。たとえば例文を丸暗記して暗誦すれば点数が取れるような問題になる。それが「会話」であるとは言いたいのだから、結局のところ会話試験の実施は不可能という見方もある。

もっともそのような単純な問題であっても、発音練習を促す以上、外国語を発する訓練になる。また、文法や綴りを問う筆記問題を出題しないことにより、会話・聞き取りの勉強に集中させ、効果を上げることができると思われる。

伝統的な文法・訳読教授法では学習者のニーズに対応しきれないという懸念から、2グルー

体制を始動させ、以上のような方針を掲げた。そして今年度のアンケートによって学生の実際のニーズが確認されたため、今後も同じ方針で授業を運営することにする。

4) 授業担当者間の連絡の徹底

・1年生「フランス語1」と「フランス語2」の担当教員間

二名の教員がそれぞれの担当（文法、表現）に集中できるように¹³⁾、互いの連絡の徹底を促した。

・1年生「フランス語1」・「フランス語2」と2年生「フランス語3」の担当教員間

第3節で述べるように、現在は共通教科書を指定していない。テキスト選択は各担当者に任せ、学生の反応を見ながら進度を決めて頂くという方法を取っている。当然各クラスで学習項目にばらつきが生じる。そこで1年生クラス担当者から2年生の「フランス語3」担当者へ既習事項を必ず伝えるようお願いした。

法政大学独自の事情により、これまで教員間でほとんど連絡が行われていなかったのが実情である。教員を対象としたアンケートでは、同一のクラスを担当するもう一人の担当教員と連絡を取り合っていると回答したのがわずか3名であり、25名が連絡を取り合っていないと回答した¹⁴⁾。2011年度はその点を大いに改善させた。

5) フランス語コミュニティ

2011年度には、教員用メーリングリストに専任・兼任全教員が登録し、メーリングリストは情報発信の手段として本格的に機能するようになった。これまでそうしたもののが存在しなかったのは、個人情報保護という理由にもよるが、コミュニティ意識の弱さからも来ている。

メーリングリストによって授業運営上の事務連絡がスムーズに行えるようになったばかりで

なく、教員間の連絡が容易になった。さらにフランス語科会のすべての教員に自由な発言の機会が与えられることになった。たとえば教科書の出版や研究会開催などの、個人的な宣伝の手段として利用することも可能である。

6) 総括

4)と5)は微々たる成果ではあるが、大きな変化への一歩として受け止めたい。そして最大の成果は改革の必要性が多くの教員に認識されるようになったことである。教員相互授業参観の実施についてワークショップ時に議論されたことからも伺えるように、教員における意識の変化が認められる。

また、2010年度に実施したアンケートは、法政大学のフランス語教育のあり方全体を見直すきっかけとなった。日頃あまり接する機会のない兼任の先生方も快く回答に協力して下さり、FD関連の重要な議題について真剣かつ前向きに検討し、率直な意見を述べて下さった。(Q10「今後10年間に法政大学市ヶ谷校地における基礎フランス語教育が目指すべき方向性」についての回答を文末に添付。)

さらに、学生を含めたコミュニティが少しずつ形成されつつある。2011年度のワークショップには予想以上の数の学生および留学生が参加し、学生間、教師間、学生と教師間で交流を深めた。それによりフランス語学習へのモチベーションが高まったという声が学生から聞かれた。

派遣留学試験の応募人数増加も、取組みの成果として挙げられる。2010年は12名の応募者の中から6名の合格者を、2011年は8名の応募者の中から5名の合格者を出した。この倍率の高さはここ数年で例を見ない。

III. 今後の課題

1) 教科書共通化

学生のほぼ大多数（234名）がフランス語初修者であるため、1年生のクラスで初級用のテ

キストを使用することに問題はない¹⁵⁾。だが授業が進むにつれて、クラスにより授業の難易度、学習内容、学習到達度にばらつきが生じている。それを防ぐため、市販のテキストの中から共通教科書を設定する、あるいは法政大学フランス語科会で独自に共通教科書を作るという案が活動当初出された。この問題について、アンケートで専任・兼任教員に意見を求めた。

まず、「フランス語1」「フランス語2」「フランス語3」における教材の共通化（Q6）への賛成者は8名、反対者12名、「分からぬ」が13名であった。

教材を共通化する場合、どのようななかたちが

望ましいかという問い合わせ（Q7）への回答として最も多かったのは、クラスごとに同じ市販の教科書を使ってリレー授業を行うのは良いが、全クラスにおける教材共通化は行わない、であった（9名）。市販のテキストを使うのではなく、法政大学の事情に合った共通教科書を作成するのが良いという回答も同数であった。また、「フランス語1」「フランス語2」でそれぞれ別の市販の教科書を使う、が5名、この二つのクラスで同じ一冊の市販の教科書を使う、が2名であった。その他、1名が文法単元や動詞活用など、パートごとのプリントによる共通化を希望した。

共通化のメリット

評価の共通化と客観化が可能になる。
情報の共有、蓄積が容易になる。
到達目標の検証がしやすい。
全学生に一定の基礎力がつく。
1年次の文法学習の進度が統一され、2年次の「フランス語3」へ学習事項と未習事項の引き継ぎが容易になる。
「フランス語1」と「フランス語2」の授業内容重複が避けられる。
学生側の不公平感解消される。
シラバスを書く手間と暇が省ける。
内外に向けて教育内容が透明化される。
とりわけモチベーションのないクラスでは、学習が容易になる。

共通化のデメリット

他の授業（学部）や先輩などから教科書をゆずり受け、欠席したり授業中の注意力がなくなったりする。
拘束されることで教員が精神的負担を感じる。
教員自身が教科書に違和感を持ち、授業がうまくいかない。
教員の持ち味が生かされない。
教材の欠点を全クラスで抱える。
学部や学科による学生の個性を抑圧する。
教師が学生の顔や反応を見ながら柔軟に授業を行うことができない。

共通化する際の条件

文法の授業以外、とりわけ「フランス語3」は担当者に自由を残す。
学部・学科による学生の資質と学習意欲の差を考慮し、学部・学科ごとに統一する。
「フランス語1」では学習すべき文法項目・基本例文・語彙・表現などの周到な吟味と選択、練習問題量の柔軟な選択余地などを確保する。「フランス語2」でも学生が共通に学習すべき内容を明確に定める。
教材を終えること自体が目標にならないよう、学習リズムにゆとりをもたせる。
期末テストも共通に行い、共通評価システムも導入すべき。
教員間の連携により、仕事の段取りや役割分担をはっきりさせ、信頼関係を築く。

自由記述 (Q8) では様々な意見が寄せられた。概要は以下の通りである。

2) ミニマム・リクワイアメント (MR) の検討・定義

このように、教科書共通化に関しては教員の中で意見が分かれ、必ずしも共通化が全体のレベルアップにつながるわけではないという結論に至った¹⁶⁾。そこでMRを設定することで、フランス語クラスの習熟度の共通化をはかることを検討した。2010年度に「フランス語1」(文法) 及び「フランス語2」(表現) のMR目安を定め、それに従って授業を進めるよう全教員に要請した。

文法に関しては新版『ル・フランセ』(斎藤昌三、白水社) をもとに定義した。従来の学習項目を一部減らし、一年間で扱いきれない分を2年生の「フランス語3」に引きつぐこととした。

それにもかかわらず、学生からはフランス語が難しいという意見が寄せられた。後期アンケートのQ4「弟妹や中高の後輩などに、大学でフランス語を学習することを勧めたいか」に対する回答は、「勧めたいと思う」43%、「勧めたくない」24%、「分からぬ」26%、「別の言語を勧めたい」7%であった。後者三つをあわせて57%となり、「積極的に勧めたい」を上回った。勧めたくない理由として、「他の言語の方が役立ちそだから」、「就職にあまり役に立たないから」という回答の他、「難しいから」が目立ったことに注目したい。また、記述式のQ13「学期最初と比べて、フランスに対するイメージは変化したか」に書かれた内容と合わせると、「難しすぎるからもう続けたくない」という感想が多く見られた。

学生のすべての要求に応じることは不可能であるものの、MRを慎重に検討する必要があることが確認された。

また、今後市販のテキストを共通化するのであれば、文法項目がコンパクトに限定された『ル・フランセ・ファシル』(斎藤昌三、白

水社) のようなものが適当と思われる。このテキストはちょうど『スピラル』の文法項目をカバーしている。そして2年生で文法項目の続きを学習できるようなテキストを使用する。たとえば『Tome 1 bis』(フランソワ・ルーセル／丸川誠司、第三書房、2012年) を挙げることができる。

MRの設定に際し、今後はヨーロッパ共通参考枠(CEFR)¹⁷⁾を参考にしたい。その場合、法政大学の学生のニーズと授業時間数に合わせた独自の枠組みの作成が必要となろう¹⁸⁾。

3) フランス語教育振興

前期アンケートの、「入学前に法政大学は語学教育が盛んというイメージはあったか」という質問に対する回答は、「あまりなかった」が46%、「まったくなかった」が23%、「少しあつた」が22%、であった。受講者数減対策として、イメージアップの必要性が認められた。

最も身近にできることは、「諸語紹介文¹⁹⁾」の改訂である。後期アンケートにおいて「どのようなきっかけでフランス語を選択したか」という質問をもうけたところ、最も多い回答は「特にきっかけがない」の90票であったが、次に多いのは「法政大学から入学前に配布される諸語紹介文を読んで」の59票であった。2011年度は写真を入れて見やすくするなど、これを刷新した。内容は法政大学とフランス語の関係、世界におけるフランス語の位置づけ、そしてフランスの文化の紹介である。フランス語をめぐる事情とフランスの文化は学生にあまり知られていないため²⁰⁾、他にも積極的に紹介する場をもうけるべきである。

その一つはオープンキャンパスであるが、これは学部ごとに実施しているイベントであり、外国語教育の宣伝の場ではない。また、現状では必修外国語は入学前に学生に選択させている。これを入学後に選択できるようなシステムに変え、各語学科がそれぞれの語学を紹介・宣伝する時間・場所があってしかるべきだが、そ

れはFDを越えた問題である。

4) フランス語コミュニティ

2011年獨協大学フランス語教授法研究会の公開シンポジウムのテーマは『今、なぜ、フランス語?』であった。その中で、コミュニティ形成の必要性が強調された。「フランス語を通してできた交流の輪によって楽しく勉強が続けられた」という声が、卒業生から多数寄せられるとのことである。

法政大学では本取組みによってある程度改善されたものの、学生や教員が恒常にまとまって活動をしているわけではない。そこで曜日・時間を限って共同研究室を開放するという案が

出ている。兼任教員と学生にも開放し、貸出用のDVDや書籍を置き、フランス語専任教員が交代で対応するのである。

アンケートでは、兼任／専任教員・フランス語履修学生が利用可能なコモン・ルームを作るというアイディアについて(Q14)、18名が賛成、3名が反対の意を表している。反対者は「学生に付き合うような制度になると兼任の方には給与外負担とも解釈できる負担をお願いすることになるのではないか、BT内の個人研究室のある階にこのようなものを設けると、音の面でトラブルが生じるのではないか」といった現実問題を理由に掲げている。実施には慎重な検討が必要となる。

資料1 2010年度フランス語教員対象アンケート

*記述式の回答は任意。

Q1. 現在、どのような側面に重点をおいて授業を行なっていますか。(複数回答可)

Q2. どのタイプの教室を使って授業を行なっていますか。(複数回答可)

Q3. 同一のクラスを担当しているもう一人の担当教員と連絡をとり合っていますか。

Q4. 担当授業の運営の現状について、専任教員に伝えたいことはありますか。(記述式)

Q5. 現在の使用教材はどのようなものですか。

Q6.「フランス語1」「フランス語2」「フランス語3」における教材の共通化に、賛成ですか、反対ですか。

Q7.「フランス語1」「フランス語2」の教材を共通化する場合、下記のいずれのかたちが望ましいと思いますか。

Q8. 教材の共通化についてご意見はありますか。(記述式)

Q9. どのような授業を担当してみたいですか。既存の授業／存在していない授業の別を問いません。(記述式)

Q10. 今後10年間に法政大学の基礎フランス語教育が目指すべきなのはどのような方向性だと思いますか。(記述式)

Q11. 本学の「フランス語1」「フランス語2」「フランス語3」の評価基準を、ヨーロッパ共通参考枠にもとづいて設定することに賛成ですか、反対ですか。

Q12. 法政大学のフランス語圏への派遣留学(協定校留学)は、各年度4校8名分の枠があります(近く5校10名分に増加する予定)。奨学金も支給されるこれらの派遣留学に応募する学生の質・量を向上させるには、どうしたら良いと思いますか。(記述式)

Q13. 兼任・専任教員が共同で使えるスペースがあれば利用しますか。

Q14. 兼任・専任教員に加え、フランス語履修学生も利用可能なコモン・ルームを作るというアイディアに、賛成ですか反対ですか。

Q15. 本アンケート、その他本学におけるフランス語教育に関連し、お気づきの点につきまして自由に記述してください。(記述式)

資料2

上記Q10への回答

どこまでを学内で教育し、どこからを国内外の協定校での教育に委ねるのか、構想が必要。いわゆる「自校教育」との関連づけも必要。各科目の定義とシステム化。
①明確な資格取得への準備（仮検への対応をしっかりと明示する。）②積極的な文化紹介（ファッション、食料品、観光、映画、スポーツ等）③現場での体験の導入（例えばフランス人に東京の名所を案内する。）
最低限のコミュニケーション能力を習得させるための統一プログラムが必要。教材やメソッドの検討を定期的に行うべき。学生のモチベーションを高めるために、基礎フランス語の段階からフランス・フランス語圏の文化を紹介する。
中国語やスペイン語に比べてフランス語は実用性が低く、日本人にとって難しいという印象が高校生や大学生にもたれているようである。あまり厳しい方向で、しかも統一教材を使うと、逃げられてしまうかもしれない。英米語や他の外国語とどのように連係していくかが課題になる。フランス語授業の内容は多様であるのが望ましいと思うが、授業名、単位数は整理した方がよい。特に2単位、4単位と2種類に分かれているのは合理性を欠く。
フランス語の基礎（文法）を履修した後、各自がそれぞれの好みに応じて様々な分野でフランス語を生かしていくような教育が望ましい。
「どのような学生に育てるのか」という大学の方針を明確にして、その方向の中で、フランス語教育のあり方を考えるべき。個人的には様々なスキルをバランス良くもった学生を育てたい。フランス語もそのうちの一つとして身につけてもらいたい。そのためには教員のまとまりが必要。
「読む」「書く」「聞く」のバランスがとれた教育。（「話す」は現状では難しい気がする。）
2年生終了時点で、簡単な文献なら辞書を引けば読めるようになる、というレベルを目指すべき。会話は、特に希望する学生以外には最低限教えればよい。
フランス語運用能力の全体的な底上げが望ましい。そのためには言語も含めたフランスの文化全般への興味を様々な角度から喚起することが重要である。
第二外国語は簡単な表現を勉強すれば十分として、かろうじて存続させている大学もあるが、日本の全ての大学がこうなっては困る。優秀で勤勉な学生が多い法政大学には、「読む」「書く」という本格的な外国語教育を継続してほしい。
①近年の世界における言語状況のなかでフランス語の占める位置の変化を直視して対応することが必要。外国語教師としては、何よりもフランス語と英語の言語的（文化的ではなく）関わりを通して教えることが、外国語能力養成の観点で重要である。②フランス語によって自分の勉学領域で何を得ることができるかを提示することが大切である。
一年次では、仮検などとまくリンクさせること、二年次以降は各学生のレベルや関心に合わせた授業選択ができるようにすることが必要である。
日本国内で誰もが自由に（無料で）フランス語と接することが出来る環境が、既にインターネット上に存在している。現代の日本における「基礎フランス語教育が目指すべき方向性」の一つは、このインターネットを上手に活用するに足るフランス語の基礎を学生たちに与えることである。

教育の質向上のために、もっと教員同士がコミュニケーションをとるべき。とりわけ同じクラスを担当する教員同士。学生が教室で習ったことを自由に実践できるような場があれば、モチベーションが高まると思う。実現のためにはそうしたことを進んで担当する教員が必要となる。

C E F R の導入により、学生にとってもフランス語の教育内容と目的がより明確になるであろう。C E F R は指示された「タスク」がこなせるかどうかを評価基準としている。従って授業内容もそのように対応させなければなるまいが、人数の多いクラスでは困難である。

資料3 2011年度前期学生対象アンケート

*記述式の回答は必須。

Q1. どうしてフランス語を選択しましたか。

Q2. あなたのフランス語のレベルはどのくらいですか。

Q3. 「以前に習ったことがある」と答えた人は、どのように学びましたか。(複数回答可)

Q4. フランス語以外に学んだ外国語についてお聞きします。どの言語を学びましたか。(複数回答可)

Q5. どのくらいのレベルに達しましたか。

Q6. フランス語の授業を受けることにより、どのような能力を身につけたいですか。

Q7. 入学前、法政大学は外国語教育が盛んというイメージはありましたか。

Q8. 大学の外国語の授業に対してどのようなことを期待しますか。(複数回答可)

Q9. 授業の担当教師について、次のうちどのかたちが望ましいと思いますか。

Q10. フランス語の難易度について、どのようなイメージをもっていますか。(複数回答可)

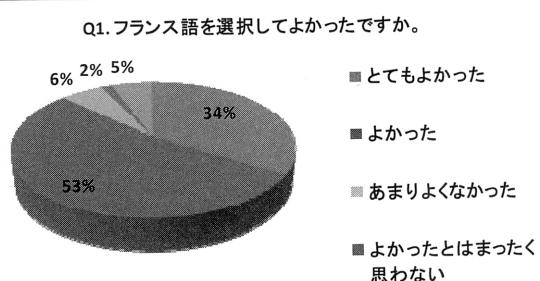
Q11. フランスに対して、どのようなイメージをもっていますか。(記述式)

Q12. フランス語圏に対して、どのようなイメージをもっていますか。(記述式)

資料4 2011年度後期学生対象アンケート結果

Q1. フランス語を選択してよかったです。

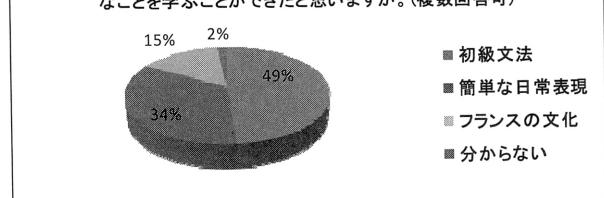
とてもよかったです	よかったです	あまりよくなかった	よかったですとはまったく思わない	分からぬ
69	109	12	3	11



Q2. 一年間週二コマのフランス語の授業を受けて、どのようなことを学ぶことができたと思いますか。(複数回答可)

初級文法	簡単な日常表現	フランスの文化	分からぬ
174	122	55	6

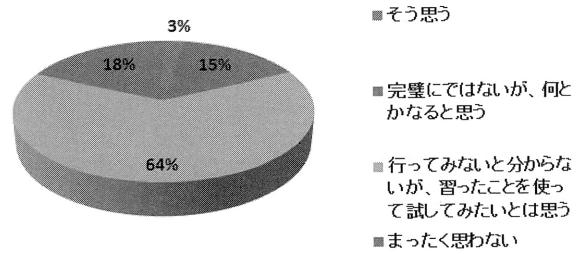
Q2. 一年間週二コマのフランス語の授業を受けて、どのようなことを学ぶことができたと思いますか。(複数回答可)



Q3. フランスやフランス語圏を訪れたとき、フランス語で必要最低限の意志疎通をはかることができると思いますか。

そう思う	完璧にではないが、何とかなると思う	行ってみないと分からないうが、習ったことを使って試してみたいとは思う	まったく思わない
174	122	55	6

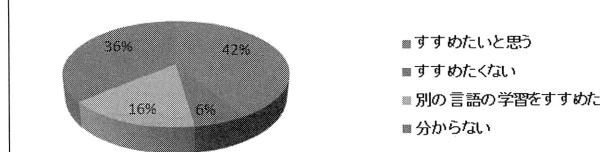
Q3. フランスやフランス語圏を訪れたとき、フランス語で必要最低限の意志疎通をはかることができると思いますか。



Q4. 弟妹や中高の後輩などに、大学でフランス語を学習することをすすめたいですか。

すすめたいと思う	すすめたくない	別の言語の学習をすすめたい	分からない
85	13	33	74

Q4. 弟妹や中高の後輩などに、大学でフランス語を学習することをすすめたいですか。

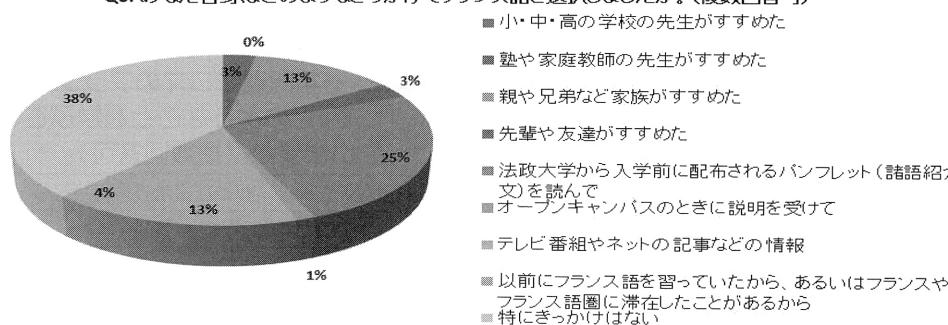


Q5. それはどうしてですか。(記述式)

Q6. あなた自身はどのようなきっかけでフランス語を選択しましたか。(複数回答可)

小・中・高の学校の先生がすすめた	塾や家庭教師の先生がすすめた	親や兄弟など家族がすすめた	先輩や友達がすすめた	法政大学から入学前に配布されるパンフレット(諸語紹介文)を読んで	オープンキャンパスのときに説明を受けて	テレビ番組やネットの記事などの情報	以前にフランス語を習っていたから、あるいはフランスやフランス語圏に滞在したことがあるから	特にきっかけはない
7	0	30	7	59	3	30	9	90

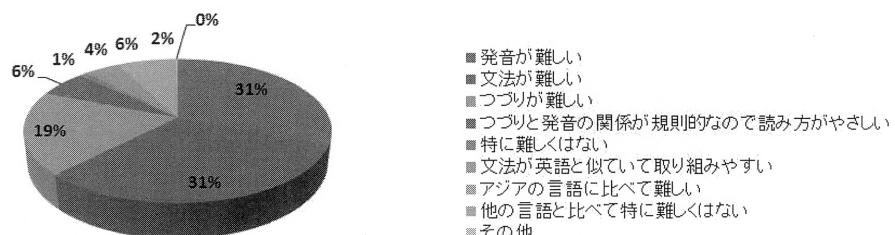
Q6. あなた自身はどのようなきっかけでフランス語を選択しましたか。(複数回答可)



Q7. フランス語の難易度について前期も同じ質問をしましたが、現在はどのようなイメージをもっていますか。(複数回答可)

発音が難しい	文法が難しい	つづりが難しい	つづりと発音の関係が規則的なので読み方がやさしい	特に難しくはない	文法が英語と似ていて取り組みやすい	アジアの言語に比べて難しい	他の言語と比べて特に難しくはない	その他
147	146	88	28	5	20	28	7	1

Q7. フランス語の難易度について前期も同じ質問をしましたが、現在はどのようなイメージをもっていますか。(複数回答可)



Q8. それは前期と比べて変化しましたか。

変化した	少し変化した	変化しない	前期に何と答えたか覚えていない
31	85	55	34

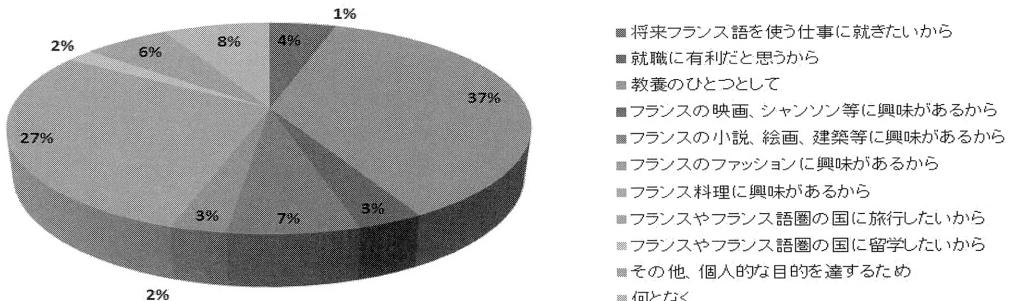
Q8. それは前期と比べて変化しましたか。



Q9. 前期も同じ質問をしましたが、現時点では何を目的としてフランス語を選択したと思っていますか。(最もあてはまるものを一つ選択して下さい。)

将来フランス語を使う仕事を就きたいから	就職に有利だと思って	教養のひとつとして	フランスの映画、シャンソン等に興味があるから	フランスの小説、絵画、建築等に興味があるから	フランスのファッションに興味があるから	フランス料理に興味があるから	フランスやフランス語圏の国に旅行したいから	フランスやフランス語圏の国に留学したいから	その他、個人的な目的を達するため	何となく
9	1	76	7	14	6	4	55	4	13	16

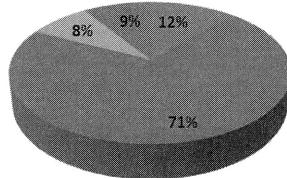
Q9. 前期も同じ質問をしましたが、現時点では何を目的としてフランス語を選択したと思っていますか。(最もあてはまるものを一つ選択して下さい。)



Q10. そうした自分の目標に近づくことができたと思いますか。「何となく」と答えた人は外国語を勉強することで成長できた部分があるかどうかという観点から答えて下さい。

一步一步着実に近づいていると思う	少し近づいたと思う	まったくそう思わない	分からぬ
24	145	17	19

Q10. そうした自分の目標に近づくことができたと思いますか。「何となく」と答えた人は外国語を勉強することで成長できた部分があるかどうかという観点から答えて下さい。

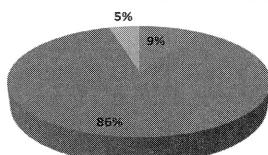


- 一步一步着実に近づいていると思う
- 少し近づいたと思う
- まったくそう思わない
- 分からぬ

Q11. フランス語を学んだことにより、日常生活の中(テレビのコマーシャルやポップ・ソング、お店の看板や料理、ケーキの名前、ファッション分野など)でフランス語を発見することはありますか。

大学でフランス語を学ぶ前からそうした単語はフランス語だと知っていた	大学でフランス語を学んだことにより、確信はないがそう思うことがある	まったくない
19	177	9

Q11. フランス語を学んだことにより、日常生活の中(テレビのコマーシャルやポップ・ソング、お店の看板や料理、ケーキの名前、ファッション分野など)でフランス語を発見することはありますか。

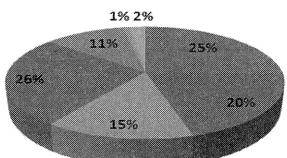


- 大学でフランス語を学ぶ前からそうした単語はフランス語だと知っていた
- 大学でフランス語を学んだことにより、確信はないがそう思うことがある
- まったくない

Q12. 2年生のフランス語の授業ではどのようなことをしてみたいですか(複数回答可)。

文法をもっと詳しく学習する	より高度な会話表現を学習する	辞書を引きながらフランス語の文章を読む	フランスの社会・歴史・文化を学ぶ	その国出身の人(留学生など)とフランス語で話す	その他	特になし
96	75	55	97	42	4	8

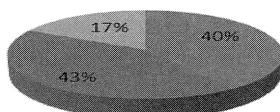
Q12. 2年生のフランス語の授業ではどのようなことをしてみたいですか。(複数回答可)



- 文法をもっと詳しく学習する
- より高度な会話表現を学習する
- 辞書を引きながらフランス語の文章を読む
- フランスの社会・歴史・文化を学ぶ
- その国出身の人(留学生など)とフランス語で話す
- その他
- 特になし

Q13. 学期最初と比べ、フランスに対するイメージは変化しましたか。(記述式)

どちらでもない	83
肯定的回答	88
否定的回答	36



- どちらでもない
- 肯定的回答
- 否定的回答

資料5 「フランス語2」試験例：前期／後期期末試験（近江屋）

文法の知識を問う筆記問題は課していない。評価は聞き取り試験とオーラル試験（一对一の面接試験）、および毎回の聞き取り試験の合計点数による。試験は前期期末試験、後期中間・期末試験の計3回行なった。前期のみ2週にわたって試験を実施した。

テキスト：『フランス語2020』（白水社）

受講者数：18名

オーラル試験採点基準：

AA：適切な文章を発し、かつ発音が優れている。A：適切な文章を発している。B：多少間違えたりつかえたりしながら答えている。C：間違いがいくつか見られ、ところどころ通じない文章を発している。D：明らかに準備していない。

実施方法：

質問文等を教師が読み上げる。

I. 前期期末試験概要

【聞き取り試験】（30分程度）

- ① 聞こえた数を数字で書く（1～100までを中心に1000まで）
- ② 文章中に聞こえた数を数字で書く（1～100までを中心に1～1000まで）
- ③ 聞こえた時間を数字で答える（例 11:15）
- ④ 聞こえた質問文にふさわしい答えの文、あるいは答えの文にふさわしい質問文を記号で選ぶ。（質問文、答えの文とも口頭で読まれる。）
- ⑤ 意味内容把握
 - a) 聞こえたフランス語の文章を日本語に訳す。
 - b) 聞こえた文章の内容と合致するものを記号で選ぶ。
 - c) 人についての紹介文に合致した人物を絵で選ぶ。

【オーラル試験】（一人5分程度）

① 質問と応答

「どこに住んでいますか」「職業は何ですか」「何歳ですか」などの質問に答える。

② 三人称による自己紹介文

イラストの人物について、名前、年齢、職業、話す言語、住所についてのやり取りを教師と行う。
(例：「彼の名前は何ですか」「彼の名前はジョンです」)

③ 時計の絵を見てフランス語で時間を言う。

II. 後期期末試験概要

【聞き取り試験】（20分程度）

- ・聞こえた文章の中から正しい文章を選ぶ。
- ・聞こえた文章の意味を日本語に訳す。

【オーラル試験】

- ①テキストの問題と同じ質問に答える。
「2007年にはどこに住んでいましたか」、「昨日の夜8時に何をしていましたか」等。
- ②次のように、教師が指し示した絵について答える。
「オオカミはどこですか」「～の下（上、前、後ろ等）」にいます。
- ③テキストの例文の会話（合計20ほどの文章）を暗誦する。当日配布する日本語訳を見ながらで良い。

【注】

- 1) Gaël Crépieux、Philippe Callens、*Spirale*、Hachette/Pearson Education Japan（長崎出版）、2008.
- 2) アンケートによると、LL / CALL教室、マルチメディア教室を使用している教員は全体の4分の1程度である。
- 3) その内容は、授業目的、教員間の関係（相互連絡の有無）、使用教材、教材共通化の賛成・反対、ミニマム・リクワイアメント、兼任・専任教員・学生の関係、コモン・ルーム創設の希望、授業運営の現状、法政大学におけるフランス語教育の将来の方向性、派遣留学応募学生の質・量向上のための方法についてである。質問項目は文末資料1に記載した。アンケート結果については本文中で適宜触れていく。
- 4) URL <http://mm.edu.i.hosei.ac.jp/mailman/listinfo/francophonie>
- 5) 英語以外の語学への関心・学習経験、フランス語・フランス・フランス語圏についての知識を尋ねた。
- 6) *Grammaire et Conversation*、Alma、2007.
- 7) 毎回1つの文章構造を学び、単語を入れかえて繰り返し会話練習を行う。学習者は第1回目の授業からフランス語の文章を発することができるようになる。
- 8) 第1グループが「スピラルクラス」、第2グループが授業進度とテキスト選択の上で制約のあるクラス、第3グループが従来のように一切の制約を受けないクラスである。2グループ体制は第3グループのようなクラスを作らないことを意味する。
- 9) 3グループ体制の成果をはかるためにも、共通試

験を実施すべきであるが、実際には13クラスにまたがる学生を一齊に集めるのは困難である。そこで代替策としてこのようなかたちをとった。

- 10) DELFは世界150カ国で実施されているフランスの語学試験である。A1、A2、B1、B2、C1、C2の6段階で評価され、A1が一番易しいレベルである。
- 11) 例えば日本の実用フランス語検定試験の場合、5級、4級、3級では会話も作文も課されない。
- 12) DELF試験の概要を教員と学生に周知するため、『Préparation à l'examen du DELF A1 (DELF対策問題集)』(Hachette社)をFD予算で購入し、教員に配布した。
- 13) 日本人教員同士がペアを組む場合、「フランス語1」と「フランス語2」のどちらを担当するのかは、出講表の記載と関係なく、教員間で決めて良いこととした。
- 14) そうした状態は授業の質向上の妨げになるばかりでなく、学生からの評判も悪い。
- 15) 現在の使用教材について（Q5）は、7名が教員自身の執筆したテキスト、8名が日本の出版社のテキスト、4名がフランスの出版社のテキスト、5名が自作のプリント、と回答した。
- 16) さらに、リレー式授業に統一するかどうかという問題がある。この点に関しても賛否両論があり、来年度はグループ①（オーラル重点クラス）についてはリレー式を推奨するというかたちをとる。
- 17) 外国語の運用能力を、読解、聴解、会話、文書作成の面で客観的に評価するための共通尺度。6段階のレベルに分かれている。2001年に完成し、欧州連合理事会はCEFRLの使用を加盟国に勧告している。

る。現在はアジア圏にも広がりつつあり、40あまりの言語に翻訳されている。

18) A1 レベルを二段階に細分化し、二年で到達できるようにするというのが無理のない設定であろう。

19) 「諸語紹介文」は入学前の学生に大学から配布される。新入生はそれを読んだ上、入学時点での必修選択の外国語を決定する。

20) アンケートによれば、学生のフランスに対するイメージはステレオタイプ化されたもの（「おしゃれ」、「かっこいい」など）が多く、フランス語圏のイメージにいたってはフランスのそれと混同されているか、ほとんどイメージするものがないかであった。